

11月10日 (金曜日)

No.168 「火花——北条民雄の生涯」高山文彦 飛鳥新社

日向の太陽と大海原で何となく随筆

ぼくも神さんだもの いっしょに生きようよ

みちひろ

6時半、シーガイア Sheraton (Tranden)の28階の部屋(2802)から見た朝日の神々しいこと。8時には、太陽は海原から遥か高いところに昇り、まばゆい光芒を放っている。宮崎を訪れた人は、宮崎の太陽は「痛い」と表現する。私は今、自分が気に入ったこの豪華なシングル(¥10,500)で、今回の神話の旅をエッセイ風に日記にまとめようとしている。昨日去った椎葉は空が狭かったから、まさに異星に降り立ったような気になる。宮崎の妻と別居する地を椎葉に決めた綾部正哉という男は気になる。満州から独りこっそり帰国した時は6歳だったという。同じく満州帰りの中元暢一氏を奇跡生還だと涙ぐむ。綾部は13歳の時、3人の霊能者や手相家から「君は45歳までしか生きられない」との宣告を受け、狂ったように読書を始めたという。知人たちと最期の年に集い、死を待ったところ、何も起こらなかったのも、全員が快哉を叫んだという。後の人生はおつりなのか。60歳の時に退官し、永平寺で3ヶ月の修行。頭を丸めて中瀬宅を譲り受け、自給自足の生活を通じ、椎葉で骨を埋めんと、5年以上陰徳を積んでおられる。この椎葉の邸に柳田國男が本当に投泊したかどうかは大した問題ではない。柳田が一室(私が泊まった部屋)を借りたのは確かだが、綾部という人物がすでに柳田を超えた、磁石的な存在に映る。柳田が「中瀬君と立夜(?)同宿した」を「中瀬君宅に5泊した」と誤って解釈されたことが、黒木氏の文献より明らかにされている。黒木盛衛氏(柳田より4歳下、68歳で死去 勝美の実父)の家で柳田は泊まったが、今はダム湖の底に眠っている。

綾部という謎の人物には妙な親近感を覚える。私より一歳下の行者だからか。いや、それだけではない。私は13歳の時より日記を書き始め、英語(英文法のことだが)にのめり込んだ。そしてあの45歳というもう一つの魔の数字だ。三島の割腹自殺のニュースで落ちこんだ。私は「私の人生45歳まで、あとはおつりだ」と豪語したことがあったが、今の私の心は晴れている。民俗学に目覚めてから、三島由紀夫を思い出に留め、卒業することに決めた。

今朝、湯舟で読み続けている高山文彦(高千穂の人)の「火花——北条民雄の生涯」は癩病患者の悲痛な執筆人生を描いた快著であるが、宮崎が大好きな川端康成が絶賛したと

いう。ハンセン病に無知な読者でも感情移入ができる作品だから、磁力がある。松本清張の「砂の器」にしても、読者を感動させ、泣かせるマグネティック・パワーがある。三島由紀夫が清張を敬遠し嫌ったことで自分が常に充電器を必要とする電池人間であることを露見してしまった。「三島作品はすべて私小説」（橋本治）とは男女間の《行》が足りなかったからか、若過ぎたからか。

三島は鬼々迫る清張を恐れた。所詮、電池は磁石にかなわない。三島は神島の公衆浴場に入らないのに、その状況を描くことのできる文才を備えていた。その才能を私は妬んだ。しかし、今や三島は過去の人となった。

旅人は歩き続ける。旅人はだれからも、何からも学ぶ。今、私は「のに」の上に傍点をふった。この不思議な日本語の用法に関し、綾部氏という。「《のに》というのは魔物だ。ここまでしてやったのに」という心の奢りがある。「施したあとは忘れて、忘れたことさえ忘れるものだ。ボランティアの驕りは無料で施してやっているというこだわりだ」それに私も加わる。

「あのボランティアというのはプロから見ると、アマチュアの甘えだ。お金を受け取るプロは結果責任を負うから、お金を要求するプロに敢えて依頼したい。ボランティア（無料）でやっているんだからと手を抜く〈甘え〉には我慢ならない」と。

この二人の会話は宮崎の県人性にかかわったものだ。ここにはボランティアが多い。金銭的に淡泊で、お人好しが多い。詐欺師はいない。詐欺の被害者は多分日本一であろうが、どうも三重県人とも似ている。神道系の県民性といってもいい。ただ黙して語らぬ。台風で180億円の被害が出ても、「ダムがなければ、こんなに、…」とぐちる人もいない。

私の恩師〈西山千師〉にたずねたことがある。「ライシャワー大使と日本全土を回られたそうですが、日本のどの土地が一番好きですか」と。「宮崎ですね。その次は札幌ですか」それ以来、宮崎へちょくちょく足を運ぶ——別に招かれているという意識がなくても。

今、私は、ネイティブが英語で内容ある授業で続けている宮崎国際大学の創始者に共鳴している。「英語を教えるのではない。英語で教えるのだ」と言う。ここで英語武蔵が乗り込むという企画が生まれたのは一年前だ。できるだけ多くのネイティブを相手にディベート〈質疑応答〉をさせて欲しいとこちらから何度もオファーしているのに、色よい返事がない。「のに」というのはよそう。私の我が出過ぎている。これでは旅人ではない。

HARAGEI、BUSHIDO、これからは「神話」か。英語では表現にしにくいコンセプトを英語という日本刀で試してみたいという野心は隠せない。インターネットでサムライ・トークという番組を実現させたいという夢が破れ、民俗学という岩戸に隠れようと、英語から離れているつもりなのに、またぞろ七段英語の孤剣が疼き始めた。いや暫し刀は抜かぬ。ゼロの気持ちで民俗学、民族学、そして文化人類学に進むと決意したばかりだ。

旅人学とはぜいたくな寄り道。しかしそれが世の為にならねば、陽明学が泣く。磁石のごとき西郷隆盛も陽明学をかじってから、点火したのだろう。私にとり今回最も悲しかったことはあの多くの殉死者を出した上椎葉ダムとの出会いであった。105名の殉死者だ

けではない。ほとんど無報酬で自分たちの村や文化が文明の暴力により、沈められたのだ。三島由紀夫の「沈める滝」ではダム設計者の意地とプライドは巧く描かれているが、沈められる側の雄叫びが伝わってこない。磁石は「譲」だけ、つまり与えるだけで満足しているのだから嫉妬はない。磁石は自分がそのまま他人なのだ。

だから清張や特攻隊の複雑な心境を描いた城山三郎、北条民雄に感情移入した川端康成を熱い思いで描いた高山文彦のけれん味のない文体に、三島は近づけない。磁力のある文体を書くには磁場を求め「行」をするより他はない。余談ながら絃道館は、そういう磁場でありたい。